その本はそこに 読書案内 6 ~手に道具を持つ人のために~

『室内』の52年 ~山本夏彦が残したもの~

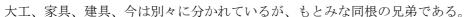


- ■今回は雑誌『室内』の52年間を紹介するINAX出版の本を案内します。 私が名コラムニスト山本夏彦(編集兼発行人)と室内のことを知ったのは、ごく 最近で、NHK 朝ドラマで暮らしの手帖の花森安治さんが取沙汰されてからです。
- ■雑誌『室内』は1955 年(昭和30年)~1961 年 『木工界』、その後『室内』 へ改題~2006年3月まで52年間615冊です。

反骨精神あふれるジャーナリスト・文芸誌の香り漂う雑誌だったようです。

- ■手に道具を持つ人のために・職人の発言を伝えるのが本誌の使命と、目で見る 大工道具、組子障子の雛型集(建具職人の腕の見せ所)などが誌面を飾りました。 そのほかの企画として下記のようなものがあったようです。
- ◆「家具をこわしてみる」 暮らしの手帖の商品テストに想を得て15万円以上の見るべきところある家具のみを解体。 広告を載せても言うべきことは言うを信条に、17年間でこわした家具は100本以上。
- ❖「日常茶飯事」 山本夏彦 巻末コラム

木工はもと大工のことである。モクノカミといえば大工の親玉で、むかし は家具も建具も作った。今でも田舎へ行けば建具屋を兼ねる大工がいる。 雪のあるうちは建具を作り、春さきになれば大工になる。兼ねないまでも、 建築と建具は分離しがたい。座敷に調和して、はじめて建具である。建具だ けが独立して美しいということはない。家具も同じだろう。





- ◆「一流ハウスメーカー30 社データ品定め」(名古屋建築ジャーナルにて 77 社掲載後 30 社抜粋) 2001 年 11 月号 住宅は建てるものではなく、買うものになってしまった。近く日本中ハウスメーカーの住宅だらけになろう。だか らよくなってもらわなければならないのに原状はどうか。よくならないのは批判がないからである。
- 一流ハウスメーカーはミサワホームであり、積水ハウスであり、殖産住宅である。一流会社の名を信用して契約す るが、実際は無名の下請、また孫請に建てさせている。

セールスマンと客は初対面である。そのとき本誌本号をかくし持つようにして、話を聞いてはいかが。ハウスメー カーの住宅を買わないでどうするか。次回は建築家・この会の会員が推す工務店を紹介したい。(左記は誌面抜粋)

- 例:一条工務店 「取材拒否」 第三者検査を依頼すると契約解除、かたくなに情報を隠す企業体質
- ① 製品の概要(構造、工法、モジュール、平均坪単価、モデルハウスの仕様、対象客年代と年収など)
- ② 営業体制(営業と技術の人員構成、設計料、現場管理、施工など)
- ③ 契約(打ち合わせ回数、契約書への添付図面、詳細見積の有無、一時金など)
- ④ 書類図面(工事監理報告書の有無、工事工程の有無表、竣工書類内容など)
- ⑤ 地盤調査 ⑥シックハウス対策 ⑦支払い方法 ⑧アフターサービス (定期点検、内装と設備の保証など)
- ⑨ 瑕疵に対する責任 ⑩その他 (将来手摺設置のための下地補強の有無など)
- ◆「言葉のいずみ」 読むに堪える雑誌として、難解で意味不明な表現を排除、業界用語、正体不明なカタカナ語は 誰でも分かるように解説した。(メタボリズム、プレゼンテーション、インスタレーションなど)
- ■雑誌室内の読者欄では、日建設計の林昌二「夏彦汚染に」、渡辺武信「もっと室内にいたかった」、赤瀬川源平「現 場からの感触が伝わってくるリアルな室内」、中野翠「渋いバーに足を踏み入れた気分」、そんな中、東京大学(建築 史専攻)の鈴木博之は、「時代のアウラ」やインスタレーションという言葉を繰り返す。アウラって何だ!変わらない 人は変わらない。笑えない現実。ほんとにこの人はこの雑誌を読んでいたのか!? (黒野晶大)